

館報 教育記念館

No.79

平成24年11月 発行



「富山県小学校教育
140年の歩み」展



思考道場
秋山先生
スペシャル公開授業



主な内容

◎教育時評 富山県小学校長会 会長 小出 薫	2
◎元気な地域づくり、元気で創造性豊かな人材の及び支援事業	3
・平成24年「学ぼう！ふるさと未来」支援事業 ・二宮展・今後の展示予定	
◎特別展「富山県小学校教育140年の歩み」	4
江戸期から昭和期（終戦）まで	
◎恒例展「第3回児童・生徒によるものづくり展」	
◎「きらめき未来塾」思考道場 お笑い道場 右脳活用道場	5
「第10回さんすうワールド展 ークイズ&パズル」	
◎第22回郷土の先賢顕彰者 ●佐藤 やい ●五十嵐 篤好	6
●海内 果 ●継続顕彰者	7
◎恒例展「第9回子どもの目 自然不思議発見写真展」	8



発行所／公益財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町1-5-1
TEL(076)444-2000 FAX(076)444-2001 E-mail:toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076)433-2770)

発行人／富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所／いおざき印刷株式会社



「学び続ける教員像」の確立

富山県小学校長会

会長 小出 薫

「学校の先生になりたい」と思ったとき、すでに25歳を超えていた。その上、教員免許状を持っていなかった。通信教育で小学校二級の教員免許状を取得しながら、採用試験を受けようというのは、危なっかしい決断だった、とこの歳になれば思う。

今年8月の中央教育審議会答申『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』を読んで、思わず自分の歩みを重ねてしまった。

なんとか取得した小学校二級免許だが、制度はその後改正され、一種免許状、二種免許状、専修免許状に区分されるようになった。免許法認定講習に通い、その一種免許状を手に入れた。ほっとした気持ちが懐かしい。その際、三つの大学で単位を取った。大学によって雰囲気が異なるのが印象的であった。学校の雰囲気の大切さを、学ぶ側から実感した。

答申では、仮称ではあるが「一般免許状」「基礎免許状」「専門免許状」の創設等、教員免許制度について踏み込んだ方向が示されている。この制度改革により、優秀でやる気のある方が一層多く、教職を志すことを心から期待したい。

ところで、今回の答申の土台を形成するキーワードの一つが、「『学び続ける教員像』の確立」である。学校を巡る厳しい状況を考えれば、「『学び続ける教員像』の確立」が求められることは容易に納得できる。教員養成、教員採用、そして初任段階から管理職段階までの現職研修を、教育委員会・学校と大学との連携・協働という視点から見直し、学びやすい環境を整えることが提言されている。

心配がないわけではない。学びやすい環境が意欲にすんなり結びつくか、という点である。『『学び続ける教員像』の確立』のため、環境整備は勿論だが、教員の学ぶ意欲が重要な課題であろう。急激に教員の世代交代が進み、時代が変わっても、

意欲の大切さが変わることはない。

最近、気になる話を、ある大学教授から伺った。異性に近づかない学生が増えているというのである。「理由を聞くと『三次元の異性より、二次元の異性の方がいい』と答えが返って来る」と微苦笑された。アニメの異性は魅力的なだけだが、現実の異性はそうはいかない。それが敬遠する理由らしい。

大学での教職の勉強も多くは机上のものと言つていいだろう。その上、大学入学までも含め、経験が乏しい世代である。例えるなら二次元で学んできた人達なのである。教職に就いてから、三次元の学校で仕事に面白さを感じることができるかが、「学ぶ意欲」の鍵となるのではないか。学校とういう三次元は、魅力もある代わりに、思い通りにいかないことが多い。困難がいろいろある中で、教職という仕事に面白さを感じるようにするために、学校に課される役割は大きい。教員にとっても、リアルな体験を通して共に学ぶ、いわば三次元の学びの場となることが、より強く求められることになるだろう。

教職人生を振り返ると、教え子の瞳の輝き、保護者の期待とともに、先輩の教えや同僚の支えがあって、日々の課題に立ち向かうことができた。そして、二級免許状であることの自信のなさが、勉強する気持ちを後押ししたように思う。恩返しの意味でも、若手教員の自信のなさを、学び続ける意欲に変える、そんな雰囲気を学校につくりたい。そのためには、先ず自身、前向きで謙虚なことが前提となろう。そのことを自分に言い聞かせなければ、とこの歳になったからこそ思っている。

なお、答申は学校が魅力ある職場となるため、待遇等の条件整備にも触れている。こちらも実現することを願って止まない。

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

平成24年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業

(助成対象校 1校に10万円助成)

— 将来にわたって、ふるさとを愛し、古里に誇りをもつ子どもの育成を願い、
地域と連携して「ふるさと学習」に取り組む学校を支援します —

助成校	実践テーマ
入善町立上青小学校	地域の自然・文化・人にかかわり、地域を愛する子どもを育てる —ぼくたち、わたしたち沢スギ守り隊—
富山市立長岡小学校	地域の歴史、自然、文化、人にかかわる活動を通して、そのよさや伝統を感じ取り、自分たちのふるさとに愛着や誇りをもつ子どもの育成
高岡市立成美小学校	I LOVE SEIBI 災害に負けない町づくりに力を尽くそう
高岡市戸出西部小学校	戸出野に誇りと愛着をもち、心豊かに生きる子どもの育成 —地域の歴史や自然、人、文化とのかかわりを通して—
氷見市立灘浦小学校	郷土を愛し、地域と関わろうとする子どもの育成

今によみがえる二宮の心

富山県小学校教育140年の歩み展 関連展示

昭和初頭、深刻な不況に見舞われた農村復興の主流となったのは報徳社運動でした。かつて県内の学校にはその名残りの二宮像がたくさんありました。



24年度後半の展示予定

- | | |
|------------------------|--------------------|
| ・特別支援学校 みんながんばってます作品展 | 11月1日(木)～11月18日(日) |
| ・第43回 富山県造形教育作品展 | 11月24日(土)～12月9日(日) |
| ・第8回 アイディアロボットフェスタ | 12月14日(金)～1月20日(日) |
| ・第23回 富山県中学校美術展 | 1月31日(木)～2月17日(日) |
| ・第6回 富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 | 2月28日(木)～4月7日(日) |

特別展 「富山県小学校教育140年の歩み」展(前編)

4月26日(木)～6月3日(日)



平成26年3月
(財)富山県ひこづり財団
富山県教育記念館

研究紀要

江戸期から昭和期（終戦）までの富山県の初等教育（小学校教育）が3度の戦争をはさみ、激動する世界の中でどのように変遷してきたのか、教育調査部会で調べたものを冊子にまとめ、一部をパネル展示しました。次年度、戦後以降について展示します。

教育資料部会 顧問：須山盛影 部会長：布村 徹 副部会長：豊田善樹 山本弘子
委員：相川 仁 石田和義 吉田優子 吉藤寿美栄 滝口教子 藤田博美 山口ひろみ
荒屋 誠 高田公美 吉尾真智子 藤城純子 竹島慎二

恒例展 第3回「児童・生徒によるものづくり展」

6月14日(木)～7月15日(日)



ものづくりは、人間社会の営みの一部であり、産業の根幹をなす重要な要素の一つです。

富山県内には、伝統的、創作的、技巧的な作品の製作に取り組んでいる小・中・高等学校が多くあります。

教育記念館では、その発表の場として「児童生徒によるものづくり展」を開催しています。今年も200点を超える作品が寄せられました。来場者は、じっくりと作品を鑑賞し、作品の多彩さに驚いたり技術の高さに感心したりしていました。

きらめき未来塾（夏休み期間中）



思考道場

県内講師（勝原亜希子、山本弘章
山越励子、中野昌生、須古充）



お笑い道場

講師 三遊亭 円窓
(落語家)



右脳活用道場

講師 ねじめ 正一
(詩人・作家)



思考道場・スペシャル公開授業

講師 秋山 仁

(数学者 東京理科大学 教育学研究センター長)

子どもたちの創造力や表現力を養うことをねらい、各分野の第一人者を講師に招き、夏休み中に3つの道場を開催しました。

参加した子供たちは、いろいろなことを教えてもらしながら大いに活動を楽しみました。次の活動を楽しみにしている子どもが多く、毎回とてもいい刺激を受けているのがよくわかりました。

恒例展

さんすうワールド展 -クイズ&パズル-

7月25日(水)~8月26日(日)



う～ん、なかなかむずかしいぞ



夏休み期間中に算数のクイズや立体パズルを展示しました。親子や友達同士で訪れた人々は暑い中、夢中で取り組んでいました。

第22回 郷土先賢室顕彰者紹介

女子医学教育の発展に 尽くした医学博士



佐 藤 や い

(1898~1964)

佐藤やい、旧姓安川やいは、明治31年（1898）、川舟業を営む弥次郎とての次女として射水郡新湊町放生津（現射水市）に生まれた。12歳で母を亡くし、15歳で近くの石黒医院で働き始めた。これがきっかけで、医学の道を志した。17歳のとき、先輩の後押しで、東京女子医学専門学校校長の吉岡彌生の書生となった。学校の事務職員として働きながら熱心に勉強し、21歳で文部省専門学校入学資格検定試験に合格し、東京女子医学専門学校に入学した。

25歳で卒業後、吉岡の薦めもあり病理学の道に進み、29歳で助教授に昇任した。昭和7年（1932）10月からドイツのフライブルグ大学へ2年間留学。石黒医院時代から「何とかしたい」と思っていたリウマチの研究をするために、ドイツ国内外で熱心に学んだ。そして、昭和12年（1937）に東京帝国大学の医学部に学位論文『冷却ロイマチナス実験的補遺』他を提出し、全国で14人目、富山県では初の女性の医学博士となった。3年後教授に昇進し、血液学の研究に邁進した。早くから吉岡から後継者と期待されていたやいは、昭和27年（1952）の母校の大学の昇格の際にも吉岡の右腕として力を尽くした。

40歳で、周りの薦めもあり、輸入販売業の佐藤清一と結婚し、いきなり四男三女の母親となった。育ての親として我が子の教育にも熱心に取り組んだ。次女の美知子によると、朝晩のあいさつや服装、食事、時間など礼儀や生活に厳しい一方で、家庭教育にも力を注ぎ、わが子も女医に育て上げた。

昭和31年（1956）、緑内障をきっかけに研究の第一線から離れるものの、女子医学教育への熱意は衰えることなく、厚生補導部長として医学生を支え続けた。病院運営や女性医学者の支援を行う至誠会副会長として、病院新築などの事業を進め、一方で会員の良き相談相手ともなり、大学を支え続けた。また、日本女医会の会長や国際女医会の理事を務めるなど、国内外で女子医学教育発展の礎を築いた。

昭和39年（1964）66歳で病に倒れ、葬儀には1500人が訪れやいを校歌の大合唱で見送った。同級生からは「万人に愛され、慕われる菩薩の生まれ変わり」、学生からは「学生一人一人の事までよく知り悲しみも喜びも共にしてくださった」と評された。

東京女子医科大学にはやいが遺した厚生会館「佐藤やい記念館」があり、医学研究者として、女子医学教育者として愛情深くまっすぐに生きたやいの志が引き継がれている。

専門員 宮崎 靖

万葉の心で暮らしを 歌い続けた農政者



五十嵐 篤好

(1793~1861)

五十嵐篤好は、寛政5年（1793）砺波郡内島村（現高岡市）の十村役、五十嵐之義の長男として生まれ、少年時代は和算学に熱中し、屈指の数学者石黒信由につき、その専門知識を生かして様々な用水開削や農政事業に尽力した。

19歳で十村役を命じられ、23歳のとき、父の之義とともに上新川郡舟倉野（現富山市大沢野）開削事業に着手し、難工事の末、水田数百町歩（一町歩は約99a）を開墾することに成功した。また、信由とともに藩命で射水郡の海岸を実測して絵図を作成。文化9年（1812）には信由との共著「筆算々法」を書き記した。

文政2年（1819）に、加賀藩が十村役31名を無実の罪で処罰した十村断罪事件に連座し父と共に入牢。高齢の父は牢死を遂げ、篤好は能登島への流刑となつた。流刑地で多数の国学書と出会い深い感銘を受け、これが国学を志すきっかけとなった。10か月後流刑を解かれ、十村役に復職し砺波郡総年寄役をはじられる。農政にいそしみ、村の面倒を見るかたわら、志した国学の学問にも力を入れ、京都の国学者富士谷御杖に入門、さらに、江戸の中村孝道にも教えを受け、越中第一の国学者となつた。

天保年間の大飢饉では、農民たちが食物を失い、家を失っていく悲惨な状況を目にし、米等の穀物を備蓄して、凶作時に備える「備荒倉」を多額の私費で設立。しかし、これが藩の嫌疑を招き、職務逸脱として罰せられ2年間の謹慎を受ける。さらに、安政5年（1858）には木綿製法を他国浪人から学ぶために無断で宿泊させたことが藩法に触れ、またも謹慎の罰を受けた。だが、謹慎中に國学の研究に打ち込み「天朝墨談」「言靈旅曉」などの著書を書き上げた。十村役にも返り咲き、文久元年（1861）に逝去。享年68歳。土木・農政・算学等に習熟し、開削工事・測量等に力を尽くし、幾多の農書を記したが、「ふすしのや詠草」全12巻5700余首の和歌は万葉調でくらしを力強く歌い上げている。終始農民として生き、十村役、村民の代表として自覚を持ち続けた歌人・国学者篤好の姿が見える。

いたづらに物な思ひそ山人は
木こり炭だけ吾は田つくる

専門員 中山 均

越中の自由主義思想の先駆者



うみうちはたす
海 内 果

(1850~1881)

海内果は、射水郡中老田村（現富山市）に久五郎の5男として生まれた。幼名は雪五郎、長じて君育、果と名乗った。海内家は、加賀藩代々の肝煎の旧家である。富山藩校「広徳館」に通い、岡田呉陽に漢学を学ぶ。明治4年（1871）、21歳で村肝煎となり村政を担当。明治9年、射水郡第14大区副区長となり、現在の杉地区の行政に携わった。青義小学校（現在の老田小学校）を築いたのはこの頃である。

明治6年（1873）、小杉の増田伝七が、郵便局経営とともに、中央の様々な啓蒙的書籍を取り寄せて販売する開智社という書店を開いた。果は頻繁に出入りし、中央の文明開化に目を開く契機となる。明治8年（1875）、東京日日新聞（現毎日新聞）に社会に対する所見などを寄稿し、しばしば掲載されるようになる。

明治9年（1876）12月、東京日日新聞の主筆福地源一郎に、論説委員として上京するように勧められ、迷った末、上京。入社後、明治維新の中心人物らと幅広い交流を深め、中央の言論界で活動し始める。やがて、東京日々新聞の売り物である社説を論述。漸進的な民権論を中央の論壇で展開し、士族中心の急進的民権論に対抗して、まず個人から町村、府県へと、下から順次自治を拡大していくことを主張。また、地租改正を批判し、西南戦争の無意味さを説くなど全国的な問題とともに、伏木開港論や北陸鉄道論など地方の問題も取り上げ、言論界の彗星的存在になった。

明治10年（1877）9月、果は郷里の有志を啓蒙するために、同郷の司法官増田賛（伝七の弟）とともに小杉に相益社を結成。射水郡の豪農層が加わった。森有礼らの明六社の学術総合雑誌機関誌「明六雑誌」同様、「相益社談」（開智社刊）を発行。勧業、教育、文芸などについて論じ、巻頭の在京の名士の論文とともに掲載した。福沢諭吉の近代私学、慶應義塾に対しては、越中義塾を創設する準備を進めていた。

明治14年（1881）8月、父久五郎を顕彰する碑を建立するため、4度目の帰郷についた海内は、腸チフスで倒れ、9月2日急死。31歳の若さであった。後の自由党の稻垣示、越中政進党の島田孝之、越中義塾の大橋十右衛門らの指導者が輩出する基礎を築いた言論界の先駆者であった。

専門員 平野 強

平成25年度も引き続き顕彰される郷土先賢者

畜産業に革命をもたらした家畜人工繁殖研究の先駆者

西川 義正（1913~1994）

西川義正は、大正2年（1913）3月、富山県上市町で醸造業を営む西田与七郎の6男として生まれた。旧制富山高校理科に進学、好きだった動物学の道を志した。

昭和11年（1936）東京帝大卒業。農林省畜産試験場に赴任し、当時まだほとんど未知の分野であった人工授精や繁殖生理の研究に取り組み始めた。西川は、從来の研究とは一線を画す実験的な手法を自ら開発した。これは畜産学に全く新しい分野を開拓するものであり、現代の生殖・免疫学等にも多大の影響を及ぼすものであった。

昭和27年（1952）にコペンハーゲンの国際家畜繁殖会議で牛精子凍結保存成功報告を知るとその実用化研究に没頭し、独自技術を確立した。それは厳選した優秀種牛の使用による体格・体型の整一化、遺伝的不良因子・生殖由来の伝染病等の根絶を達成するものであった。昭和32年（1957）、京都大学農学部家畜繁殖学講座の初代教授に就任。昭和39年（1964）には、先駆的研究を認められ日本学士院賞を受けた。

昭和51年（1976）、京都大退官後、帯広畜産大学学長を務め、広い人脈を生かし海外の大学や研究機関との交流に力を注いだ。昭和59年（1984）には、郷里の富山女子短期大学学長を引き受けている。平成6年（1994）2月、芦屋市内の自宅近くで散歩中に交通事故に遭い急逝した。享年80歳。今日の世界の畜産業は、西川の研究・技術開発によって近代産業として成り立ち得るにいたったと言っても過言ではない。

優れた先見性と技術革新で地域産業の振興に尽くした人

竹平 政太郎（1908~2003）

竹平政太郎は、明治41年（1908）、西礪波郡福田村辻（現高岡市）に小作農の父六左衛門の長男として生まれた。小学校5年生の時、父が借金を残し突然病死したため、一家の大黒柱として苦労を重ねた。

大正10年（1921）小学校卒業と同時に地元の銅器着色所に奉公し、銅器着色の技術の習得に励んだ。昭和3年（1928）20歳の時、竹平着色所として独立し、「より品質のよいものを、真に価値のあるものを」をモットーとして、売り上げを伸ばした。一方で、この頃すでにアルミ時代の到来を予想し、アルミ加工技術の研究を行っていた。昭和14年（1939）竹平製作所を設立し、アルミ製鍋・釜の製造を始めた。

昭和35年、三協アルミニウム工業株式会社（現三協立山アルミ㈱）を設立した。アルマイド加工技術を使った第一号商品「サンキヨーナべ」が大ヒットし、創立1年で売り上げ三億二千百万円、従業員四百数十人という規模に急成長させた。また、昭和44年（1969）富山軽金属工業を設立し、地元でアルミ精錬、加工を一貫生産する体制作りに努めた。

竹平は、地元に安心して働ける職場をもたらすことを目指した。これらの功績により、勲2等瑞宝章、高岡市名誉市民の称号等数々の受章をしている。平成15年6月23日逝去。享年94歳。地域産業の振興に尽くした生涯であった。

救民の信念で新田開拓に尽くした土木工事の鬼才

椎名道三（1790~1858）

椎名道三は、寛政2年（1790）、新川郡小林村（現滑川市）の十村役、宝田宗三郎の家に生まれ、すぐに、下新川郡大熊村（現魚津市）の椎名道山の養子となる。幼い頃より数学に才を發揮していたといふ。相次ぐ飢饉に苦しむ人々を救おうと、文化3年（1806）、わずか17歳にして押場峠（現魚津市）への引水に成功し新田を開く。文政8年（1825）、失敗が続く室山野（現滑川市）開拓に着手し、2年で完成。土木技術者としての名声が一気に高まった。天保3年（1832）、義弟に椎名家を譲り、安田村字永田（現滑川市）のちの熊林村に転居。

天保8年（1837）、十二貫野（現黒部市）の開拓を加賀藩に命じられる。本流から離れた黒部川左岸の高台への用水開削は黒部峡谷の断崖絶壁を延々と切り開く難工事だが、天保10年（1839）5月に着工すると翌年7月には早くも宇奈月谷から別所まで約20kmに通水、天保12年（1841）9月には尾ノ沼谷までの全長を完成させる。隧道や分水、巻江の導入、不可能に思える用水の谷越えなど、一滴の水さえ無駄にしないための道三の知恵と技術が集約されていた。多くの困難を巧みな土木工事で克服する姿に人々は驚愕し、「鬼神の業」というものさせあった。

安政4年（1857）、湯治中に倒れ、翌年5月、自宅で病没。享年68歳。私財を肥やす、生涯を通して農民のための新田開拓に尽力したその生き方は「東海道に二宮尊徳あり北陸に椎名道三あり」とも称せられ、郷土教育教材に数多く取り上げられている。

「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月6日(土)~10月7日(日)

子どもたちが、身の回りの不思議や関心をもつたことを撮影した写真展です。今年は66校224点の応募がありました。子どもたちの視点でとらえた自然や生命が生き生きと表現されました。友達の作品を見て、少しでも自然への興味や関心の芽が育つ機会になるよう願っています。



口の中に東京タワー!! (3年)



せみのふっきん運動 (5年)



あおむしとかえるのにらめっこ (1年)



お空におじさん (1年)



発見 ロールケーキ (1年)



大きいの小さいの (2年)



目があつちやつたね! くりくん (2年)



キラキラとまと (3年)



「も」の形のヤモリ (4年)



岩の中には… (4年)



かえるの王子様 (6年)



あ・と・が・き

今年度も、教育記念館1階多目的ギャラリーでは特別展や恒例展を開催しています。展示に際し、多くの関係者の皆様のご協力を感謝申し上げます。

この号がお手元に届くころには、3階の郷土先賢室では新しい顕彰者の展示が始まっています。どうぞお立ち寄りください。